

小杉町民図書館について

風景と町に開かれた「よむぞうくんの図書館」

(株)前川建築設計事務所

取締役
さかた いずみ
坂田 泉

はじめに

「よむぞうくん」は小杉町民図書館のシンボルマークだ。公募され、町立中学校に通う女の子の案が採用された。図をご覧ください。なんともほほえましく、親しみやすい絵柄だ。シンボルマークだけではない。図書館の西面を飾るステンドグラスの絵柄も町の小学生を対象に公募され、優秀作4案を組み合わせたものになっている。館名には「町立」ではなく、「町民」の文字が冠された。

小杉町民図書館は、名実ともに町に開かれ、親しみやすい図書館として、この春、富山県小杉町にオープンした。



設計コンペに始まる

話は1999年5月にさかのぼる。「町立小杉図書館新築設計技術提案書」の提出依頼がわが事務所に届いた。所長(現相談役)の田中清雄が富山出身であることと、横浜市中心図書館などでの実績がかわれ、提案の機会が与えられたという。他のメンバーはすべて地元的设计事務所だった。

さっそく現地へ飛び、町役場に隣接する敷地を訪れた。1999年5月17日のことだ。敷地は矩形の平坦な土地。しっとりと濡れた草むらのはるか上方からヒバリの声が聞こえた。なによりも目に焼きついたのは東の彼方に見える立山連峰の神々しい姿だ。そして、その手前には黒河とよばれる一帯のなだらかな丘陵の緑。これらの眺望、すなわち東側への眺めに配慮した計画としなければならない。「風景と町に開かれた図書館」というコンセプトの母胎は、すでにここで生まれていた。

提案のスタディは即日、開始された。コンペの案の生まれ方にはいくつかのパターンがある。日程が長いのか短いのか、要求される条件がやさしいかむずかしいかなどもよるが、きわめて短時間のうちにもうこれしかないというアイデアを見つけられる場合と、七転八倒の末にようやく案にこぎつける場合とがある。私の経験ではどちらかというとな前者のほうがよい結果となる。おそらく安産の場合のほうが案の素直さ、自然さ、わかりやすさといった面が失われにくいからだろう。

小杉の場合は安産の典型だ。早々と案のポイントは三つに絞られた。建物に「入りやすいこと」、

構成が「分かりやすいこと」、そして「眺めがいいこと」。

これらを頭のすみに置きながら、スタディを開始。入りやすさは敷地東側「大学通り」からのアプローチを主に考え、東側に館内の様子がよく見える円形のガラスのふくらみをとる。その中は雑誌や展示のコーナとし、「町民のサロン」とする。

次は「分かりやすい」構成。これは発想自体が分かりやすくなければならない。かまぼこ型の屋根で被われた東西に細長いボリュームを縦に二分割し、南側を二層分の高さの開架閲覧室、北の半分は1階を事務関係、2階を書庫、会議室とする。ひとつ屋根の下の一体的な雰囲気とするため、屋根の背骨の位置にトップライトを流し、館内をひとつの光で満たす。

「眺めのいい」図書館とするためには、東へのビスタに配慮した。閲覧室の東側のゾーンは子どものコーナーとした。ここも「町民サロン」と同じく、ガラスを円形にめぐらし、眺めを確保。エントランスから入るとすぐ左手、子どものコーナーを通してはるか遠方に立山を望むことになる。さらに、2階会議室ロビーの外に「立山展望デッキ」をとり、1階エントランスホールとオープンな階段で結んだ。

さて、コンペには目玉がいる。べつに度肝を抜くような仕掛けはいらない。町から渡された資料をもう一度、熟読する。その中で、「町民参加による朗読ボランティアの拠点を目指す」という言葉に共感した。

「情報の提供者」としての図書館についてはよく語られる。「情報へのナビゲーター」としてのライブラリアンの重要性も。しかし、インフォメーションセンターとよばれるような図書館にはあまり魅力を感じない。この図書館は本と人を結ぶだけでなく、本を媒介として人と人が結ばれる場にしよう。目玉は「お話コーナー」だ。お話コーナーをこの建物の一番快適な南東の角、子どもの本のコーナーのつながりの中に置いた。ここなら道ゆく人からもよく見えるし、眺めもいい。

提案書の最終頁に、子どもたちに囲まれて昔話をするおばあさんの絵を添え、ほぼひと月に渡る提案書づくりは終わった。

提案書の審査にはヒヤリングが実施された。案の説明では三つのポイントの他、とくに朗読ボランティアの場としての「お話コーナー」の重要性を強調した。「このコーナーから本と人、人と人とのつながりが生まれ、広がることを祈願する」とスピーチを結んだ。

そして、気分の落ち着かぬ3週間が過ぎた7月5日。待望の採用通知が届いた。



設計に入る

コンペに盛り込まれたアイデアを現実のものにしてゆく次の段階が始まった。基本設計を経て、実施設計、積算へと続く。構造や設備などの技術的問題も解決しなければならない。町からの要望も次第に細かく、重みをもってくる。夢が形になってゆく重要な過程だが、どちらかというとなんか楽しいものではない。とにかく、夢みたくを色あせぬまま実現するように心がけた。

ここでは設計上のテーマとなった技術的な問題に話題をしぼろう。

・英国産レンガの外壁

外壁はレンガである。レンガの歴史は古いが、今なお世界中でもっとも信頼のおかれ愛用されている素材のひとつだろう。現代の工業製品の素材

には、当初は美しいがあとは汚くなる一方というものも少なくないが、レンガは違う。土を焼いたその風合いは時とともに味わいを深める。

ところがこのレンガ本来の持ち味がこの頃、求めにくい。レンガも工業製品のごとくに均質、均一に作られるようになってきた。とりわけ日本のレンガにその傾向は強い。そこで英国産のレンガにたよることになった。英国の（に限らず、ヨーロッパ全般かもしれないが）ものづくりには、「人は人」という気概が感じられる。他の人がどう作ってしようと自分の納得のいくやり方でものをつくる。レンガでいえば大昔のままの風合いを守る人もいれば、均一、均質で生産性重視の人もいる。だから製品にバラエティがあり、またそれぞれの製品を支える多様な消費者もいる。英国のレンガは期待どおりの風合いを出してくれた。

・外断熱と断熱材

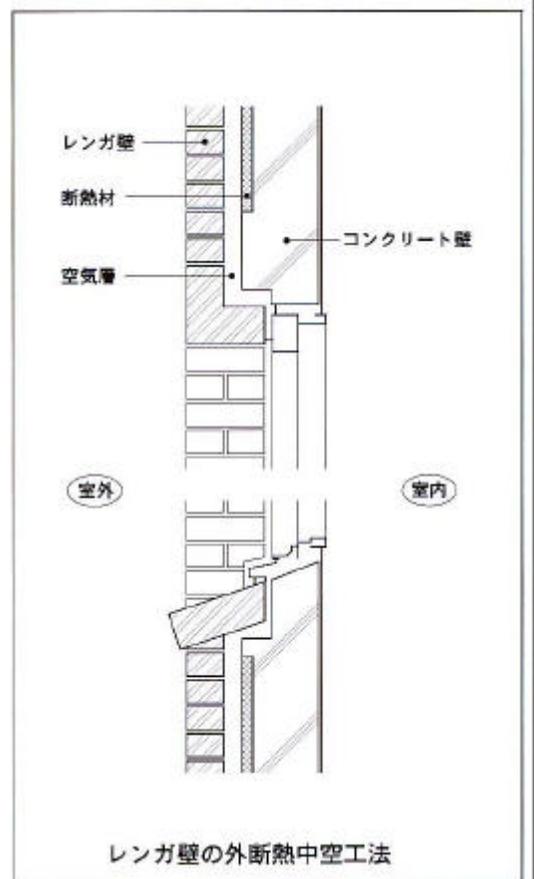
外壁をレンガにしたのにはもうひとつ技術面での理由がある。この図書館はいわゆる「外断熱」としている。建物の躯体をその外部で断熱する方法だ。冬には一度躯体が暖まってしまえば、翌朝まで冷えることはない。夏には躯体から感じる熱の放射がほとんどない。要するに室内が外気の影響を受けにくい構造になっている。

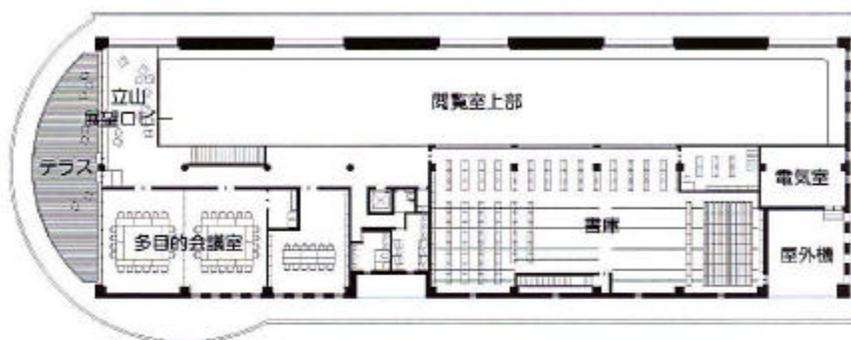
外断熱はいいのだが、苦勞するのは断熱材の選定だ。一般的には外断熱の場合、ウレタンとかスチレンといった石油化学製品を外壁に吹きつけたり、打ち込んだりする。しかし、長い先の将来を考えると、石油化学製品の貼りついたコンクリートは廃棄がむずかしい。外部とはいえこれらの断熱材は可燃性で燃焼すれば有毒ガスが出るのも気がかりだ。そもそも石油に依存する建材を無反省に使い続けることに抵抗がある。そうした考えから、「木繊維板」という材料を使うことにした。間伐材の繊維をセメントで固めたもので歴史は古い。断熱性能だけをみれば石油化学系の製品に劣るが、地球環境的な視野から考えれば使う理由は十分にある。

ただ、吹きつけが可能な石油化学系断熱材と違い、完全に建物をくるむことができず細かい箇所

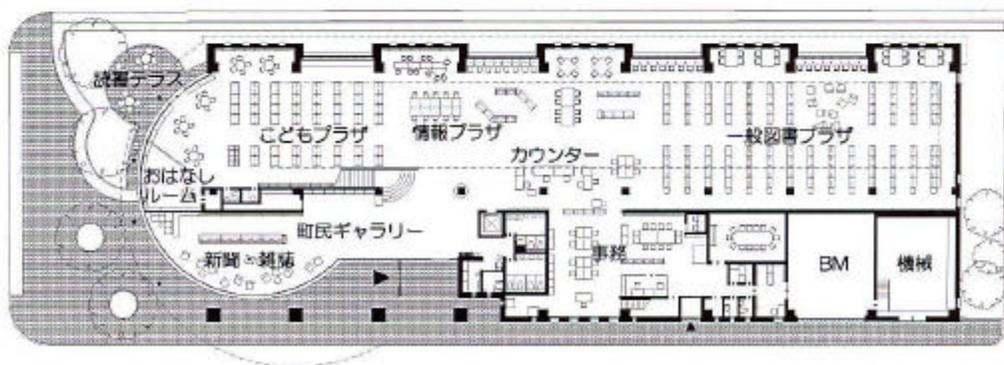
施工が大変な点など、木繊維板の欠点も多い。環境負荷が少なく、かつ施工性のよい断熱材の開発が期待されるどころだ

さて、レンガの続きだが、こうして外断熱をすると当然、外部には断熱材が露呈してしまう。これを見えなくし、日射や雨から守るのがレンガの役割だ。断熱した躯体の外側にさらにレンガの壁を建てるという二重の構造になる。レンガ壁は躯体から離して積み上げる。空気層が間にあることで、レンガ壁の裏に回った水は下に落ち、断熱材とその内側の躯体には伝わらない。また、この空気層には気流が発生し、廃熱を促すことで断熱効果を向上させる。レンガ壁の外断熱中空工法により、この図書館の室内は熱コントロールのしやすい環境となった。





2階平面図 S=1/600



1階平面図 S=1/600





表情がやさしく、中がよく見えるから入りやすい



ひとつ屋根の下のオープンな開架閲覧室



2階ロビーから閲覧室を眺める



こどもプラザとおはなしルーム



エントランス脇の新聞・雑誌コーナー

書架は本の舞台

図書館で人が本によりよく出会い、親しむために家具の重要性は強調してもしすぎることがない。とりわけ書架の大切さはここであらためていうまでもないだろう。

書架の設計は配架される本の内容と量に応じたレイアウトの検討から始まる。コンペの段階で容量のチェックと書架レイアウトの考え方は整理してあるので、この段階では大きな問題はない。むしろ、問題はその次の段階、書架をどのように作るかだ。

まず予定されていた予算枠が少なすぎた。学校図書館のグレード程度の金額だった。発注者が予算を策定する段階では図書館の規模も計画もまだ雲をつかむようなものだから、あまり綿密な検討もせず他館の例などから類推して決めてしまう。確たる根拠のないまま、その金額で家具備品の設計、発注となるケースは多い。幸いにも小杉の場合は関係者の尽力により設計の過程で軌道修正され、決して潤沢ではないが適正な予算が確保された。

次に書架の形の問題。書架は単に本を納める箱ではない。利用者を触発する展示機能ももつ。そこで議論的となったのは、書架の天板の有無だ。天板がなく本に溢れた書架とするか、整然と本を枠づける書架とするか。

天板についてはどちらもあると思う。そもそも本をどう見せるかは天板だけの問題ではない。奥行きが深すぎ、本が縮こまって見えるような書架は論外だが、閲覧室のすべての書架が本をフェースアウトに並べられる機能をもつ必要もない。本の展示は書架とは切り離して別のコーナーでという方法もある。とりわけ子どもの本は顔を見せたい。ただそれも書架の機能だけで満たすのではなく、閲覧室全体で考え、より効果的に効率よく本の顔を見せられる場所を確保すればよい。要は本の見せ方は単に書架だけの問題ではなく、図書館全体の計画の中で考えるべき課題だと思う。

あくまで書架は本の背景にあるべきもの。劇場でいえば舞台だ。いろいろな工夫を懲らし、本の見せ方、並べ方もさまざまという書架もあるが、

広くもない書架列の間であまりに「啓発的に」（おしつけがましく？）本が展示されているのに出会うと、書架の仕掛けに本が踊らされているような気がして、（私の場合）うんざりする。

小杉の書架の場合は、予算の制限もあり、あらたにデザインする余裕はなく、結局、図書館家具メーカーの標準品の木製書架の仕上げを特注で指定材種に変えるというものに落ち着いた。カウンターもそれに準ずる。材種はハードメープルとした。横浜市中心図書館の書架以来、気に入っている素材で、白木の家具ともよく調和する。

今回のように一望に見渡せるワンルームの閲覧室の場合、書架や家具、サイン、細々とした備品にいたるまで、その相互の調和は重要だ。色彩計画でも建築の壁、天井の色は白を基調とし（建築の仕上げも本を引き立てる背景に徹したい）、床カーペットやソファなどのファブリックはグリーン系（外の田んぼの緑とつながるように）、家具、書架、サインは白木のクリアー仕上げに統一した。

あとは本と利用者の登場を待つだけというプレーンな舞台に館内は仕上がった。

これから図書館になる

上述したようにこの図書館は、風景と町に開かれ、人と本、さらには人と人との結びつきの場となるべく企画され、建設された。しかし、この図書館が本当にそうした場となるかどうかは問われるのはこれからだ。

設計者が図書館というとき、それは実は、限りなく図書館になるはずの空虚な器に過ぎない。その器を真に図書館にするのは、運営する人々と訪れる人々との協力による作業だ。時間もかかる。

外壁のレンガがもう少し風合いを増す頃、ふらりと訪れてみたい。そこにどんな光景が繰り広げられているか。不安でもあり、楽しみでもある。

小杉町の皆さん、どうかこの図書館をよろしく頼みます。「よむぞうくん」のよく似合う図書館に育ててくださいますように。